

**3 - 4 : 形而上学の可能性**

- |                     |         |
|---------------------|---------|
| 1. ホワイトヘッド哲学へのアプローチ | 5/26    |
| 2. ホワイトヘッドの形而上学の枠組み | 6/9, 16 |
| 3. ホワイトヘッドと宗教論      | 6/23    |
| 4. プロセス神学とキリスト教思想   | 7/7     |

## EXKURS2 - 1

**\* 宗教と科学 - 宗教学の科学性、生命、環境 -**

- |                      |        |
|----------------------|--------|
| 1. 「科学としての宗教学」       | 6/2    |
| 2. 「宗教改革と科学」         |        |
| 3. 「生命倫理の新しい動向」      | (10/6) |
| 4. 「終末論とエコロジー・エコノミー」 |        |

**1 . 科学としての宗教学**

「宗教と科学」の問題は、宗教研究の科学性(宗教を科学することは可能か? いかにし  
て?)の問いを含む。宗教学の科学論(宗教哲学・宗教学基礎論)

## (1) 宗教学の科学性

1. 宗教学: 広義(神学 / 宗教哲学 / 現代宗教学)と狭義(現代宗教学)  
規範 / 本質 / 経験(現象)
2. マックス・ミュラーの『宗教学入門』(一八七三年)
3. 「サイエンス」(science) = 「科学」の成立  
「啓蒙的科学としての近代科学」 宗教学の科学性
4. 経験科学として宗教学
  - (1) 経験的事実(実験・観察)から理論(原理・本質)へ
  - (2) 価値中立性、判断(= 偏見、先入観)の保留、自然的定立のエポケー
5. 研究過程
  - ステップ1: データの収集(宗教史学、人類学など)
  - 2: データの記述・整理・分類(宗教現象学など)
  - 3: データの分析あるいは理論化(宗教心理学、宗教社会学など)
  - 4: データの意味の理解・解釈(宗教思想研究へ)
6. 留意事項: データ収集の前提  
「仮説 - 検証」(予備的考察 + 直観 = 仮説)、仮説の歴史性・解釈学的循環構造
7. 仮説: 宗教概念の予備的規定  
宗教現象の多様性・流動性と宗教現象の独自性の両面を適切に扱う

## (2) 宗教とは何か(宗教学基礎論 = 宗教の科学あるいは宗教哲学)

8. 広義と狭義の宗教規定: 実体的規定と機能的規定

多様性は機能において分析する

9. J.Dewey, *A Common Faith* 1934:

「名詞の宗教」と「形容詞の宗教(的なもの)」との区別

「宗教(すでに述べたように、宗教一般といったものは存在しないのであるが)とは、緩やかなあるいは緊密な制度的組織といったものを有する特殊な信念と実践の集合体を意味している。それに対して、形容詞の<宗教的な>ものは、制度的なものであろうと、信念体系としてあろうと、明示可能な存在(たとえば、歴史的宗教や実在する教会。引用者補足)としては何も指示しない」(8)

「経験の質としての<宗教的な>ものは、これらの諸経験(美的、科学的、道徳的、政治的な経験、交遊や友情といった経験。引用者補足)のすべてに属する何ものかを意味する」(9)

「叙述された経験の内に認められる現実の宗教的な特質は、生み出された効果であり、生活とその諸条件のよりよい調節であって、それはこの効果を生じる仕方や原因ではない。経験が作用する仕方、その機能が、宗教的価値を規定するのである」(11)

10. ルター『大教理問答書』: 宗教 = 全心を置くもの

金、財産、技能、才能、寵愛、友情、名誉などの宗教性

11. 宗教的機能: 意味世界の根拠付け(正当化と転換)

12. 近代日本の宗教史から

第一次宗教ブーム: 江戸時代末 ~ 明治期

天理教、金光教、黒住教、大本教など

第二次宗教ブーム: 第二次世界大戦後(1950年代)

創価学会、立正佼成会、霊友会、生長の家、PL教団など

第三次宗教ブーム: 1970年代以降

統一協会、真光系の諸教団(崇教真光、世界救世教など)、GLA、

オウム真理教、幸福の科学など

13. 宗教ブームと社会変動の相関性

社会システムの変動による宗教的機能の顕在化

価値変動(ライフスタイル、生の意義付けの変動) 新しい根拠への要求

本質的な不安定の自覚 = 不安

14. 広義の宗教: 意味世界の根拠の担い手

狭義の宗教: 意味根拠の具体的な形態化と制度化

(2) 宗教 - 呪術 - 科学の三分法と現代宗教学

15. 広義の宗教概念から「宗教 - 呪術 - 科学」三分法へ

意味世界を構築する際の三つの機能・要素

(1) 意味根拠への志向性

(2) 意味根拠の具体的な形態化

意味世界内の素材から構成された宗教的象徴・隠喩

経験・日常

宗教

類比

### (3)意味世界の合理的探求

#### (3)宗教現象のモデル化

##### 16.仮説をモデルとして提示し検証する

現実の宗教現象は通常かなり複雑な構造を有しているが、本書のモデル化では、複雑な宗教現象も、基本的には比較的単純な構造(基本構造)から構成可能であるということを前提にする。宗教現象の分析は、まず単純な構造から始め、次に必要に応じて諸条件を付加することが有効なアプローチとなる(困難は分割せよ)。

宗教現象の構造モデルを説明するに当たり、日常的な経験からの類推を積極的に行う(既知の事柄から未知の事柄へ)。

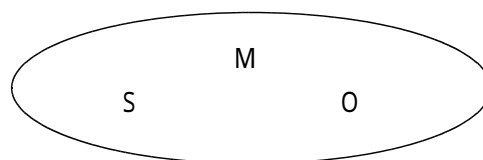
説明に際して必要となる事例には、純粋な例を用いる(理想化して考えよ)。

##### 17.宗教現象の基本構造をモデル化:

「キリスト教徒は聖書の神を礼拝する」

「SがMにおいてノを通してOを信じる」(「S - M - O」モデル)

宗教現象の基礎単位(「S - M - O」モデル)



S : 信仰者の宗教的志向性

O : 宗教的志向対象

M : 宗教的志向性の具体的成立の場

##### 18.「S - O」という相関関係(純粋意識の領野における志向性と志向されるものとの相 関性)

##### 19.信仰の現象学:典型例(理想化)

彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。(マルコ12.28-31)

##### 20.「神への愛」(=信仰)を構成する「精神」「思い」「力」感情、知性、意志

「心」:それらの統合機能

人格の全体性(=関心)としての信仰

##### 21.「尽くして」 究極性

無限・絶対・全体 cf. 日常的関わり

##### 22.神と自己の相関性:「あなたの」神

「あなたは誰であるのか」という問い(自己同一性)の問いと、神(広義の神)の問い(あなたの神は何か)との相関性

23.わたしの生(=生活+生涯+生命)のすべてがそこへと方向付けられた究極的目的(=生の究極的根拠)としての「神」

24.神認識と自己認識(罪認識)の相互関係

「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのがわかります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。(ローマ7:22-24)

25.自己と神との相関性 創造論/投影理論

26.狭義の宗教:具体的なイメージ化 象徴世界としての宗教(M)

27.象徴の実体的多様性と機能的分析

媒介機能:(1)SとOの媒介=宗教経験の成立

宗教現象学:オッター(聖なるもの・ヌミノーズ)

エリアーデ(ヒエロファニー)

(2)経験と表現の循環的媒介(交互性)

(3)自己の統合(人格統合):ユングの精神分析

(4)自己と他者の統合(共同体の統合):儀礼論・祭り論

28.統合機能の二つの形態

(1)意味:意味は実体ではなく関係である

(2)力:象徴は感性・無意識・身体へ作用する

29.夢のシンボリズム(フロイト)

夢の解釈学(夢の意味)

夢の経済学・力学(欲望論)

<文献>

1. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』(北樹出版)

2. ティリッヒ 『信仰の本質と動態』(新教出版社)

3. シモーヌ・ヴェーユ 『重力と恩寵』(講談社文庫)

「神への愛と不幸」(『現代キリスト教叢書6』白水社)

4. 池上嘉彦 『記号論への招待』(岩波新書)

5. 森 哲郎 他編『経験と言語』(大明堂)

6. 島園 進 他編『宗教のことば』( )

7. リクール 『聖書解釈学』(ヨルダン社)

8. 長谷正當 『象徴と想像力』( )

9. 立川健二・山田広昭 『現代言語論』(新曜社)

10. 瀬戸賢一 『レトリックの宇宙』海鳴社 1986

『レトリックの知』新曜社 1988

## 2. 宗教改革と科学

1. 宗教改革の思想内容と近代世界の成立

信仰のみ、聖書のみ、万人祭祀

## 2. 近代世界とキリスト教:

(1)理神論やユニテリアンなどのキリスト教的合理主義と世俗文化の形成

(2)近代的世俗性に対する批判運動(敬虔主義, ヌソジスト, ペンテコステ運動, さらにファンダメンタリズム)の発生

## 3. 宗教改革の聖書解釈と科学研究

科学研究と聖書との調和という問題:

R. ホーイカース『最初のコペルニクス体系擁護論』 すぐ書房

## 4. バートランド・ラッセル:『西洋哲学史』

「同様にカルヴァンは、『世界は固く据えられ、決して揺らぐことはない』(詩編93編第一節)というテキストによって、コペルニクスを論破し、次のように声を大にして非難した。『誰が聖霊の権威の上にコペルニクスの権威を敢えて置こうとするのか』、と。」

## 5. カルヴァンの「適応の原理」(principle of accommodation)

「モーセは、常識ある普通人の誰しもが教えられなくても理解できるような事柄を平易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦勞して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すということは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするとところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかつたのである。」

## 6. 聖書テキストの平易な文体は、神が一般の人々の理解力に自らを適応させた結果

神の真理は、科学者が理解するような数学によって表現することも可能

新しい天文学などの科学研究は、神の創造行為の讚美である

### < 文献 >

1. マクグラス 『科学と宗教』教文館

2. リンドバーグ/ナンバーズ編 『神と自然』みすず書房